

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Associationの活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

<速報です>

北海道東部の標茶町の民有林で、2015年1月26日に、山林の枝打ち(幹から生ずる下枝を鉋や鋸や柄の長さが1.2mほどの刃先が尖った鉋のような刃物がついた鉋鎌で切ることを)をして居た村上豊さん64歳が、穴から飛び出てきた熊に襲われ頭部損傷で死亡する痛ましい事故が発生しました。

まだ明確ではありませんが、加害熊は育児中の母熊の様です。母熊は穴に近づく足音に気づき(門崎の実験では、穴の中に居ると、約10m先を歩く雪上の足音が、穴の中に響いて来ます)、穴を保持するという本能的行動で、穴から飛び出し襲ったものです。同様の事件は1970年以降今日まで、今回のを含めて7件発生しています。

<今回の問題点>

- ① 熊の冬籠もり期に(11月下旬から翌年の5月上旬)、施業する場合は、あらかじめ、熊穴がある地域か否か確認すべきなのにしていない。熊穴は昔から特定の場所にのみ、造られるので、老練な猟師は識っているはずですから聞けば良い。
- ② もしも、分からない場合は、熊穴は斜面に造られますから、そのような場所では、施業予定地に、10m間隔で、2m程の赤テープを10m間隔で、木の枝に付け下げておきますと、熊は環境の変化を嫌いますから、古穴があっても、熊は使いませんから、そのような対処をすべきなのにしていない。それば、今回の様な、事故は防ぎ得たと思いますが。
- ③ それにしても、加害熊を殺そうと、標茶町役場ではやっきになっていますが、私から見れば、この熊も被害者です。子が居たようですが、新生子か1歳子であれば、母熊は元の穴に戻りますが、子が2歳であれば、他所の記憶している穴に行きその穴に入ります。
- ④ それにしても、この熊は、再度穴に人が近づかなければ、人を襲いませんから、執拗に追い、殺すべきではありませんが、マスコミに登場する熊研究者なる連中は無知で、その熊を殺すなど一言も言いません。私は北海道新聞の電話取材を26日に受けた際、その熊を殺すべきで無いと言う事を書くように要請しましたが、全く書きませんでした。道新の記者も客観的に事象を判断出来ないようです。 詳報は追って配信致します。

(門崎 允昭 記) (丁)